
嫌い嫌いも……？

鈴夜 音猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫌い嫌いも……？

【Zコード】

Z4949L

【作者名】

鈴夜 音猫

【あらすじ】

意地つ張りな少女、雅^{みやび}。対するはいつもへらへらしている雄大^{ゆうた}。

果たして二人に恋の花は咲くのだろうか？

?

あんなやつ、大っ嫌い

生徒会に昼休みは存在しない。

特に学校行事前になると、私達役員は机にかじりつくことになる。

だというのに、たった一人ここにいない人物がいる。

「副会長……会長がいません」

「分かつて。いいから仕事して」

会計の子が泣きそうな声をあげるけど、私は書類から目を上げずに言つた。

そう、ここにいなのは他でもない生徒会会長で私の幼馴染みであるバカ。

この忙しい時に何してんだか。

まあ、いても役に立つかは別だけど。

「あ、雅～」

雅、とは私の名前。

人の名前を間延びした声で呼ぶバカは一人しかいない。

「死ね」

書類の記入に使っていたペンをヤツに投げ付ける。

チツ、避けやがった。

「雅、だめだよ。女の子が『こんな』としげりや」

へらへらと笑いながらペンを差し出すこの男こそ、私の幼馴染みで会長であるはずの雄大。

「うぬわこ。仕事しろ」

雄大からペンを奪い返し、また書類を書き始める。

私は小さい頃からこいつのへらへらとした態度が嫌いだった。

前会長がなんでこんなものを推薦したのか全く分からぬ。

仕事しないでへらへらしまくつて、なんなんだか。

だから私はこいつが大っ嫌い。

「副会長、会長と仲良いですよね」

ヤツが資料室に入つていいくと同時に、役員の一人がそう言った。

「はあ？ どじが？」

委員のメンバーからあがる声にすうとんきょいな声が出た。

「これのどじが仲良いのよ。

「喧嘩するほど仲が良いって」

いや、私達のは違つから。
ていうかいい迷惑。

「私、会長嫌いだから」

本人が奥に引っ込んで行つたのをいいことに私はきつぱりと言つた。

けど委員のメンバー達はそろつて首を傾げる。

「付き合つてゐるのでは?」

…ヤメテクダサイ

そんなこと、実際になつたらじんましんが出そつ。

「そんなわけないでしょ」

「えへへ？ 残念だなあ

背後で聞こえたのは明らかに今までいなかつたヤツの声。

「だから、いつ死んでいいつー」

そう言ひて振り向きやがれ、ヤツに物を投げたのはましまでない。

?

放課後。ようやく帰る用処がついたのは、辺りが暗くなってきた頃だった。

「よし、終わった」

綺麗に揃えた書類の束をホツチキスでとめて、私は大きく背伸びをした。

そして視線をある一点に向ける。

(こ)のやう……仕事もしないで……(

机に突っ伏し、死んだように動かないのは他でもないあのバカ。

他の役員はすでに帰つていて、生徒会室には私とこいつしかいない。

「起きろ、バカ。帰るよ」

持つてた書類で頭を叩くとむづくりと雄大は起き上がった。

「おわった?」

「うん。ほら、帰ろ」

家が近所だから帰る方向も同じ。
だからなのか、一緒に帰るのが当たり前になってしまっている現状。

(これじゃ勘違いもされるか)

思って当たつてやつと納得。

でももう習慣になつてゐるから、今さら別々に帰るのも変な感じだし。

「雅？」

「……っ……」

気が付くと、目の前に雄大の顔があつて。

私は心臓が飛び出るんじゃないかと思つほど、驚いてしまつた。

「ちよ……近い」

払いのけようとして伸ばした手を掴まれた。

そしてだんだんと近付いてくる雄大の顔。

なんとか直視できなくなつて、私は目をギュッと瞑つた。

「はい、とれた」

「……？」

恐る恐る目を開けると、いつものへらへらと笑う雄大がいた。

距離もいつも通り。

そして掴まれていた手も放された。

「髪に」ハリついてたんだ」

そう言ってへらへら笑った雄大は私から離れて一人分の鞄を手に取つた。

「置いてっちゃうよ」

そう言い残し、雄大は先に歩き出してしまつた。

なのに私はそこからすぐには動けなかつた。

なぜなら、自分でもびっくりするほど、顔が火照つていたから。

?

「あのさあ……なんで元気ないわけ？」

翌日。登校した私は生徒会ではなく、教室の机に突っ伏していた。

飽きれ顔で私を見下ろしてるのは親友の桜。

「……おはよ」

「おはよ……じゃなくて。何? あいつと何かあった?」

「うう……」

さすが親友。鋭い指摘。

桜が言った”あいつ”とはあのバカのこと。

私の親友である彼女は当然あいつとも仲が良い。

「あのね……」

親友の桜になら言つてもいいか。

そう考へて、私は昨日の出来事と、私の胸のもやもやを桜に話しだした。

「……んで？ 何でか分かんないけど顔が真っ赤になった、と」

「う、うん」

何故か目を輝かせて身を乗り出してくる桜に、私は半身を引きながら頷いた。

「そうか、そうか。しかしそれが何かは分かつてない……」

しきりに頷いてる桜に私は首を傾げるばかり。

何か分かつたなら教えてくれたらいいのに……

そう思いながらじっと見ていると、何故か満面の笑みを浮かべた桜は、私の肩をポン、と叩いた。

「青春だねえ」

いや、何が？

訳の分からぬ桜の言動に詳しく聞こいつと口を開きかけたのだけど。

「おー、席につけー」

担任教師の登場により、私の疑問はお預けになつた。

結局、桜からは何も聞き出せないままお昼休みになってしまった。

生徒会室に行くのは億劫だつたけど、桜に教室から追に出されてしまい、行くしかない。

「……こんにちは」

恐る恐るドアを開けると、中にいたのはたつたの一人。

しかも、今一番会いたくなかった人物だった。

「雅！朝いなかつたから心配したよ」

「うー、うめん……寝坊しても」

駆け寄ってきた雄大と向となく目を合わせられなくて、軽く「まかしながら席に座る。

「へえ？ 靴あつたのに？」

「……バレてるし

「えつと、その……」

もう完全にじどうもどり。

慌てる私の前まで来た雄大は、机に手をつき、私の顔を覗き込んできた。

「……っ」

「なあ。俺のこと避けてる?」

「顔、近づ……」

目の前にある雄大の顔にまた頬が熱くなつてくる。

だから何なのよ、これは

「雅? 熱が……?」

「そ、触らないで! !」

額に触れようと伸びてきた手を咄嗟に払う。

それと同時に立ち上がり、後に逃げたことで倒れた椅子が大きな音を立てた。

訪れたのは氣まずい空氣と沈黙。

私の心臓はうるさいくらいにバクバク言つてゐるけど。

「「「」めん」」

謝つたのは同時だった。

でも何で雄大が謝るの？

首を傾げた私に、自嘲気味に笑つた雄大。

「触られるのも嫌なほど、俺、嫌われてたんだな」

「あ……あの……」

何て言えばいいかなんて分からない。

雄大を嫌いなのはホントだもの。

……ホントのはずなのに、胸が痛むのは何で？

「もう話しかけたりしないから。……帰りも今日から別々にしてよ」

「わ、わ……」

視線を反らした雄大に手を伸ばしかけた時、次の授業の予鈴が鳴つた。

「放課後の委員会、今日は来なくていいよ。……じゃ」

するりと私の前から去つていく雄大。

私は彼を呼び止めることができなかつた。

「はあ……」

冷たい鉄のドアに頭を「ン、ン」と寄り掛からせ、口から出たのは溜め息。

生徒会室を出て、逃げるよつに辿り着いたのは屋上に出る壁の前だつた。

「くじむなあ……」

嫌われてゐるのは田も承知。

昨日、だつて、役員達にきつぱつと言つたのは聞いてたし。

けど

「避けられた……」

嫌いって言われるのよりショックがデカイ。

だつて、嫌いって言いながら、話したりじゃれたりはしてくれてたから。

でも今朝、靴はあるのに生徒会室に来なかつた。

だから昼も来ないかもつて思つてたから、來てくれたことに嬉しく

なつた。

それなのに。

一気に奈落に落とされた感じだ。

「俺何した……？」

雅の態度がおかしくなつたのは昨日の放課後。

一人でいつものように帰っている最中、雅はもうおかしかった。

話しかけたらびくびくするし、ずっと視線を合図わせようとしてないし。

初めて見る素つ氣ない態度。

「何したの、俺……」

彼女を怒らせるのは多々あった。

大半は「仕事しろっ！」って。

一応、俺なりにやつてんだけど、彼女にはやつてるよつて見えないらしー。

けど、怒りながらいつも助けてくれる。

まあそれで彼女の気を惹こうとしてたりするんだけど。

今回、彼女が怒ってる訳が分からぬ。

分かつてるのは、完全に嫌われたことだけ。

俺はビックリしながら想いつで、ドアに頭をぶつけた。

何でだる。

こんなに胸が痛むのは。

「雅、行かなくていいの? 生徒会

「……うん」

教室で桜が聞いてくるけど、私は昨日と同じ返事を返した。

あれから一日。私は生徒会室に一回も行ってない。

他の役員達が時々来て、報告とかしてくれてるから仕事には支障はないけど。

「副会長が行かないのってどうなの?」

……痛いとこ突くなあ

「桜の意地悪……」

「てか何で行きたくないのよ」

「それは……」

あいつが来なくて良いつて言つたし。

それって、私はこりないつてことでしょう？

「それでいじけてるんだ？」

「いじける？なん……

「あいつに嫌われたつて思つてるんでしょ？」

そりや、あんなことしきやつたし……

「それで落ち込んでるんだ。あんなにあいつの」と嫌つてたのにね
？」

「……何が言いたいの？」

この前からそう。

何か知つてるつまこのに教えてくれない。

「雅は鈍感なんだもんね」

よしよしと私の頭を撫でる桜。

「か、酷くない？」

「雅は嫌いつて言つながら、本當は好きなのみね。あいつのこと

……は？

「嫌い嫌いも好きのひちひってね」

「え、待つて……私、あいつのこと好きなのー？」

衝撃の事実つてやつ？

驚いてる私に、桜は不敵に笑つた。

「”嫌い”つていうのはさ、そんだけ相手のこと気にしちゃつてんのよ。雅は何でいつも嫌い？」

「こつもへりへらしてるとか……」

その姿にイライラしてた。男のくせにしつかりしてないし……

「それが何でか考えたことある？」

「え……？」

何でか？

何か理由なんてあるの？

「後は自分で考えなさい」

そう言つて、桜はにつゝつと微笑んだ。

最終話

放課後。静まり返った生徒会室のドアの前で、私はなかなか動けずにいた。

さつき出てきた役員の子によれば、中に残つてるのはあいつだけ。

『最近、元気ないんですよ。会長』

そう教えてくれた役員の子が帰つてから早一十分。

「……よしつ」

女は度胸！

私は意を決してドアを開けた。

魂が抜けるとか言つけど、まさに今の俺はその状態。

「会長、この予算案なんですが……会長？」

遠くで役員達の声がある。

けど、全く話の内容が頭に入っていない。

雅に来なくていいことだったから一日。

自分がかりておきながら激しく後悔している。

「副会長ですか……」

雅に報告と言った役員の声に俺はびっくり起き上がる。

報告と称して見てもうりつ雅の様子。

我ながら女々しいけど、自分で行く勇気はなかった。なんせ嫌われてるし。

「元気でしたよ

「…………そり

役員のやつが気を遣つてくれてるのなんか知らない俺は思いつつきつへじむ。

そしてその気持ちのまま、机に思い切り額をぶつけた。

ドアを開けると、机に突っ伏す雄大の姿があった。

寝てるのはいつものことだけど……

「雄大？」

ゆっくり近付きながら、恐る恐る声をかける。

雄大は全く動かない。

「ゆう……」

肩を叩くと伸びた手が空をかいた。

何故なら雄大が起き上がったから。

「……みやび？」

ぼーっと私を見つめる雄大。

寝惚けてる？

「おはよ」

「……はよ」

とりあえず言つてみたらやつぱりへらへら笑う雄大。

「帰らないの？」

「みやびがいる……」

聞いたことに答えず、雄大は首を傾げた。

「なんで？」

なんでつて……やっぱり私のことなんてもう……

「俺、みやびに嫌われた」

まだ少し夢の中なのか、雄大は小さい子みたいな話し方をする。

「俺、嫌われた……」

まるで捨てられた子犬みたいに、雄大は悲しげに俯いた。

「……雄大は私のこと、嫌いになつた？」

恐る恐る聞いた一番の不安。

すると、雄大はブンブンと首を大きく横に振った。

「良かつた……あのね、私……雄大が好きみたい

ゆっくりと紡いだ言葉。

雄大を見ると、ポカン、と口が開いていた。

『雄大が好きみたい』

雅が夢にまで出てきたんだ、と自分がアホらしくなつてた時に耳に届いた言葉。

同時に視界が開け、夢見心地から現実に引き戻された。

「……へ？」

目の前に立つ雅の姿がはつきりと見える。

混乱する俺に、雅は深呼吸すると、真っ直ぐに俺を見つめた。

「雄大が好き」

「……マジでっ！？」

思わず立ち上がり、机にバン、と手をついた。

俺の勢いに驚きながらも、頬を染め、小さく頷く雅。

あーもうっ。かわいいつ。

「あやつ……ちよ、雄大！」

大急ぎで雅に近付いて、逃げないように腕の中に閉じ込める。

嫌われたと思ったから余計嬉しくて。

俺は雅に頭を叩かれても彼女をしばらく離さなかつた。

最終話（後書き）

一応、一人目線での話はこれにて完結ですが、あと一話あります。あと一話はおまけとして、親友、桜田線です。

最後までお付き合いくださこませま（――）

おまけ（前書き）

親友、桜目線からの一人。

おまけ

翌日、登校した私は絶句した。

「なんであんたがここにいる?」

私と雅は同じクラスだけど、こいつは違うクラス。

なのに何故か雄大は私達のクラスにいた。

「俺もこのクラスがいい。雅といる」

どうやら誤解も溶けて上手くいったらしい一人。

それは喜ばしいけど。

「女々しい」と言つたな!」

言葉と共に蹴りをお見舞にする。

全く……この女々しさを直せって……

「桜、心配かけてごめん」

雄大を足蹴にしてると、雅が申し訳なさそうに私を見ていた。

「雅、幸せ?」

「え?……「ん」

「なりいいのよ」

雅には満面の笑みを贈る。

「ちょっと雄大!あんた、もうちょっとしつかりしないと私が雅も
らうから」

「「なんで?...」」

私の言葉に突っ込む二人。

ハモつちゃつて……息ぴったりじゃないの

「雅泣かしたらただじやすまないわよ?」

雄大の胸ぐらを掴み、雅に聞かれないよう耳元で囁いてやる。

ブルッと体が震えたのは、单にくすぐつたいからじゃないはず。

「ほら、さつさと自分のクラス戻んなさい」

雄大を立させて背中をドンと押す。

つんのめりながら辿り着いたドア付近で、雄大は私を軽く睨んだ。

「あ、雄大!」

雄大に微笑んでみせた私の脇を雅がすり抜けていく。

雄大に駆け寄った雅は、何かしら耳打ちした。

ほんのりと頬を染める一人。

「……じちそーさま」

まあ上手くいって良かつたじゃん。

特に雄大。

やつと片想いが実ったんだから。

雄大がへらへらしてるのは雅にだけ。

それを見た人は皆、雄大の気持ちなんてすぐに分かった。

それを知らないのはたった一人。

一番知つてもらいたい子。

ねえ、雅。

嫌いって言いながら、あんたはすぐにあいつのミスに気付くよね。

それってずっとあいつを田で追ってるからでしょ？

嫌いって気持ちは、裏を返せばそれだけ相手を気にしてるってこと。

いわば、嫌い嫌いも好きのうちってことよね。

【End】

ねめむ（後書き）

いいもで読んでいただきありがとうございました(*^-^*)

怒濤の投稿ラッシュで読者の方を迷惑させた感が如まませんが、これで完結となります。

またお付合いただきありがとうございました。また次回お会いできました(――)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4949/>

嫌い嫌いも……？

2010年10月12日12時50分発行